

# 三条遺跡物語

第99話

生涯学習課 文化財係  
☎0256(46)5205

## 「八十里越を越えた先人たち② ～歴史の道 八十里越 その8～」

天明3（1783）年の浅間山の大噴火による降灰は、関東や東北地方に大凶作をもたらし、未曾有の大飢饉となりました。そのため、東北地方の諸藩は、あまり凶作とはならなかった越後から多くの救援米を購入しました。

奥会津地方でも天明4年正月までに2千人以上もの餓死者が出たため、救済の手当金で越後米1千俵を買入れ、八十里越で緊急に運び込むこととなりました。この時の八十里越は、江戸時代初期のように整備されておらず、牛馬の往来ができない難路であったため、人足の背負いで運ぶしかありませんでした。

越後国燕町で買求められた救援米1千俵は、三条町を経由し五十嵐川舟運で下田郷の森町まで運ばれました。ここからは陸路で、吉ヶ平村から八十里越を越えて叶津村を経由して黒谷組の郷蔵へ搬入されました。約400俵近くが人足賃などの経費にあてられ、600俵余りが、困窮している村々に配分されました。

越後からの救援米が八十里越を越えたことの意義は大きく、命をつなぐ重要な街道として奥会津の人々に再認識されたことで、その後の八十里越大改修への働きかけにつながっていきます（次話に続く）。

この古文書は、越後より救援米が運び込まれた際に、月日、重量、人足名などを記録したものです。

写真2は、大塩組越川村（福島県金山町）分として3月25日に運ばれてきた米の明細で、下段にはそれを運んだ「越後葎谷村（三条市葎谷）又次郎」ほかの人足名が記されています。

写真1 福島県指定重要文化財  
長谷部大作家文書

「天明四年三月 越国ヨリ御買入米受払帳」(表紙)  
(所蔵：長谷部イネ氏)



写真2 「天明四年三月 越国ヨリ御買入米受払帳」(部分)

# 三条遺跡物語

第100話

生涯学習課 文化財係  
☎0256(46)5205

## 「八十里越を越えた先人たち② ～歴史の道 八十里越 その9～」

前話では、天明の大飢饉の際に、救援米として600俵もの米が八十里越を越えて奥会津地方にもたらされたことを紹介しました。

この飢饉から50年ほど経た天保4（1833）年と7年に再び奥会津地方を大飢饉がおそいました。三条で買入れられた救援米は八十里越で送られ、飢餓に苦しむ奥会津地方の多くの人々を救いました。

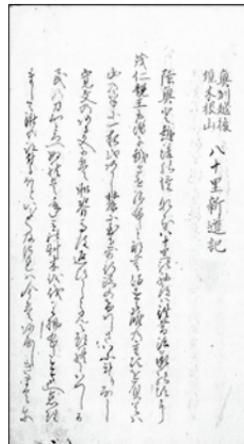
この時の移送も、背負子によるものでした。急峻で道の手入れが悪く大変苦労したため、牛馬が往来できる道に改修するように奥会津の人々は切望しました。

八十里越の改修に向けての取り組みは、すでに天保3年に見られます。この年に目安箱が設置され、奥会津の古町組、和泉田組、黒谷組、大塩組から八十里越改修願が提出されました。「八十里越は難所のため、輸送の駄賃が高く、諸物が高いものとなっている。特に塩は新潟で買入れ、津川（阿賀町）から野沢（福島県西会津町）を経由して運ぶため高値となり困っている。平坦で距離も短い蒲生村（只見町）と大谷村（三条市）を結ぶ新道を開削したい。」

とのことでしたが実現しませんでした。

本格的に八十里越の大改修が動き出すのは、平岡文次郎が田島代官所（福島県南会津町）に赴任するのを待たなければなりません（次話に続く）。

写真「奥越境木根山八十里新道記  
（馬場新家文書『峠を越える人々』  
2005福島県歴史資料館）」



この古文書は、八十里越の天保の大改修の発端から完成に至るまでの経緯を記したものです。

発端として、天保3年に目安箱が設置され、八十里越の改修願が出されたと書かれています（写真左上）。

# 三条遺跡物語

第101話

生涯学習課 文化財係  
☎0256(46)5205

## 「八十里越を越えた先人たち」⑬ ~歴史の道 八十里越 その10~

天保の大飢饉の救援米移送では、八十里越が牛馬の往来ができず大変難儀をしたため、奥会津地方の人々は峠道の改修を切望したことを前話で紹介しました。

奥会津地方は南山御蔵入領として、長く会津藩の預り支配地となっていました。天保8(1837)年に幕府代官による直支配に替わりました。そして、天保9年8月には再び凶作となり、飢饉の様相が現れたため、奥会津地方の黒谷組など4組の代表は連名して「会津伊南伊北郷より八十里越開発願書」(写真1)を田島代官所(写真2)に出しました。

この時の田島代官は、越後水原代官と兼務する平岡文次郎でした。平岡は前任の川浦代官の時に、信濃川通船を開通させた手腕を買われ、飢饉で痛手が深い奥会津地方の南山御蔵入領を復興させるために、幕府が送り込んだ代官であったと言われています(次話に続く)。



↑写真1  
福島県指定重要文化財 長谷部大作家文書「会津伊南伊北郷より八十里越開発願書」(所蔵：長谷部 イネ氏)

八十里越の山道は荒れ果て、背負子の往来も難渋になっている。6年前の大凶作の際には、伊南・伊北郷では夫食米(ふじきまい)が不足し、救援米を買入れ八十里越にて運送した際には、多くの駄賃がかかってしまった。八十里越が牛馬の通れる道になれば、越後から買入れる米、塩、諸品が値下がりとなる。ぜひとも村松藩とも掛け合って欲しい。(大意)

写真2→  
田島代官所が置かれた田島陣屋跡(現福島県南会津町役場)



# 三条遺跡物語

第102話

生涯学習課 文化財係  
☎0256(46)5205

## 「八十里越を越えた先人たち② ～歴史の道 八十里越 その11～」

平岡文次郎は天保8(1837)年5月に田島代官に就任すると、南山御蔵入領の全村を回り民情調査を行い、領民たちからは八十里越牛馬往還道開鑿の嘆願が出されました。

平岡代官は、飢餓の大被害に遭いやすい領内を改善するためには、八十里越の開鑿が最良策であることを知り、兼務していた水原代官所管内の福島潟開拓を請負った市島徳次郎・佐藤伊左衛門をはじめ水原十三人衆と呼ばれた大地主や豪商たちに八十里越開鑿の重要性を説いて、献金の要請を行いました。

これに対し、深山幽谷の難所を切り開くという実現が難しいと思える工事計画に、一人も応じる者がいませんでした。しかし、平岡代官の南山御蔵入領の窮民を救いたいという切なる願いに、豪商の佐藤伊左衛門の分家で中和泉屋と称した佐藤友右衛門が千両、市島次郎吉が二百両を献金することを申し出ました。(写真)

こうして資金の見通しがついたことから、平岡代官は、天保13(1842)年3月に工事目論見書を作成し、伺書とともに幕府勘定方に提出しました。老中水野越前守から「御下知書」が下り、ここに八十里越の天保の大改修が始められることになりました。

(次話に続く)



写真 大竹門三家文書  
「八十里越普請付願書控」  
(所蔵：大竹伸二氏)

### 釈文

右は私共御代官所奥州会津郡叶津村より堀丹波守領分越後国蒲原郡吉ヶ平村迄の間道、字八十里越新道切開の義、平岡文次郎見込を以、私支配所同郡水原村佐藤友右衛門并下条村一嶋次郎吉儀、其節右の趣承り及普請入用として友右衛門金千両、次郎吉二百両差出候

# 三条遺跡物語

第103話

生涯学習課 文化財係  
☎0256(46)5205

## 「八十里越を越えた先人たち㊦ ～歴史の道 八十里越 その12～」

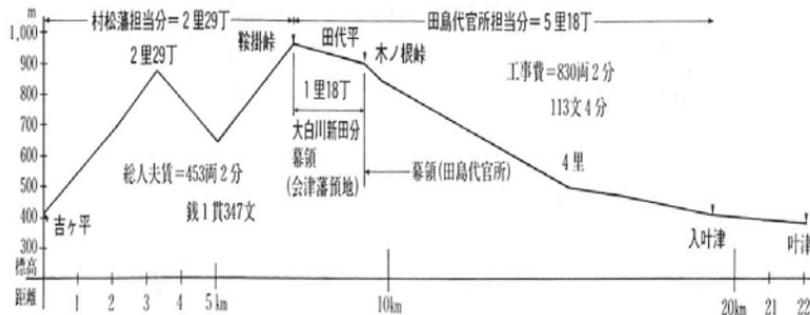
前話では、天保13(1842)年、平岡文次郎(びんじろう)田島代官が「工事目論見書」を幕府に提出し、老中から「御下知書」が下り、八十里越の天保の大改修が始められることになったことを紹介しました。

天保13年7月には、平岡代官が武蔵・下総の代官として転出しましたが、八十里越切り開き御用掛りに任ぜられ、引き続き八十里越の改修を担うことになりました。

八十里越の普請は、天保14年8月に開始されました。工事区間は、吉ヶ平から鞍掛峠までの2里29丁の村松藩領吉ヶ平村地内、鞍掛峠から木ノ根峠までの1里18丁の幕領会津藩領所大白川新田(南魚沼市)地内、木ノ根峠から叶津村までの4里の幕領田島代官所付き叶津村(福島県只見町)地内の3区間に分かれ同時に行われました。

幕領叶津村地内と大白川新田地内は地元で工事費を負担できないので、佐藤友右衛門、市島次郎吉の献金千二百両で賄われました。

吉ヶ平村地内は、村松藩の手伝い普請という形で行われ、森町組・長沢組・鹿峠組の下田三ヶ組が総懸りの負担で、費用のほとんどを拠出しました。(次話に続く)



八十里越(吉ヶ平～入津)高低図及び開削工事区分担図

(伊藤正義「八十里越開削と会津南山御蔵入領・越後村松藩領下田三ヶ郷」  
『江戸時代の流通』1989 福島県立博物館)

# 三条遺跡物語

第104話

生涯学習課 文化財係  
☎0256(46)5205

## 「八十里越を越えた先人たち②⑥ ~歴史の道 八十里越 その13~」

前話では、八十里越の天保の大改修で、吉ヶ平から鞍掛峠くらかけまでの2里29丁については、下田三ヶ組の総掛かりの負担で行われたことを紹介しました。

この天保14(1843)年の普請の概況は次のとおりでした。

- 6月22日 森町組村々の代表が大庄屋所に集められ、普請の説明
- 7月26日 三組代表が御所平まで普請場所を見分
- 8月 6日 森町組で会合を開き、各村々の人定割を決定し、工事の仕方を指示
- 8月 7日 黒鍬頭取、村方代表が登山し、番杭打ち、縄張り作業
- 8月13日 平岡文次郎が吉ヶ平に到着
- 8月14日 鍬はじめ
- 8月15日 普請総掛かり
- 8月17日 早水村分普請終了
- 8月18日 森町、濁沢、永島、笠堀、長崎村分普請終了
- 8月19日 大谷地、中野、遅場、田屋、南五百川村分普請終了
- 8月20日 大谷、庭月村分普請終了
- 8月21日 荒沢、名下村分普請終了
- 8月23日 牛ノ尾村分普請終了
- 8月24日 塩野淵村分普請終了
- 8月27日 吉ヶ平、棚鱗村分普請終了

- 8月28日 葎谷、北五百川、栗山、鹿峠、長沢村分普請終了
- 9月 7日 普請役の梶山と、平岡文次郎手代の皆川が検分下見  
に田代平話所から吉ヶ平へ(道幅狭く、2間幅にするよう指示あり)
- 9月13日 手直しに三組が登山
- 9月19日 手直し総仕上げ
- 閏9月1日 普請検分役小笠原信助が八十里越検分



会越八十里越山道之図(部分)(中和泉家文書 新潟県立文書館所蔵)  
八十里越を詳細に描いた絵図。天保の大改修時のものといわれ、水原の豪商、佐藤友衛門旧蔵とされています。三条などの主な町までの里程も明記されています。

# 三条遺跡物語

第105話

生涯学習課 文化財係  
☎0256(46)5205

## 「八十里越を越えた先人たち②7 ~歴史の道 八十里越 その14~」

前話では、天保14(1843)年に行われた八十里越大改修の吉ヶ平から鞍掛峠までの概況を紹介しました。

越後側の工事は、8月7日に1番杭を鞍掛峠に打ち込み、工区に連番を付けて取り掛かりました。また、道筋に大工が小屋を建てました。村松藩郡奉行などが詰めた空堀小屋では、幕が張られ、高張提灯が掲げられました。

普請では、鞍掛峠は掘り下げられ、その先に新しい道を開いて従来からの道に結び付けられました。牛馬が往来できるように、2間幅に広げたため、従来の道を造り直した所も多かったようです。

空堀からブナ沢に至る間は、大石や岩が立ちはだかる難所で、大岩を2つに切り割った箇所もあったようです。鉄鑿小屋が掛けられ、大きな石割りに

人で10日間以上もかかりました。

9月19日には、道幅を2間3尺とする手直しの総仕上げが行われ、村松藩領での工事は終わりました。検分を待つばかりとなった9月22日、叶津村から馬10頭が吉ヶ平村にやって来ました。翌日雨の中、馬1頭に5斗4升の塩を背負わせ、叶津村へと帰りました。八十里越が牛馬のすれ違いができる道路幅に大改修されて、初めて馬が往来した記念すべき出来事でした。

(次話に続く)



1 番杭が打ち込まれた鞍掛峠



切り割られた大岩(御所平)

# 三条遺跡物語

第106話

生涯学習課 文化財係  
☎0256(46)5205

## 「八十里越を越えた先人たち② ～歴史の道 八十里越 その15～」

江戸時代の街道には宿場があり、休泊と荷物継立つぎたての業務を併せて行っていました。

八十里越には宿場がなかったので、天保の大改修後の物資輸送を円滑に行うために、荷物継立所の設置が必要となりました。8里の間のどこに設置するか検討され、ほぼ中間に位置する田代平とすることで話し合いが行われました。大白川新田側が、継立業務が大きな負担となることから反対し、会津側の木ノ根小屋を荷物継立所とすることとなりました。

また、八十里越で奥会津地方に運ばれる物資で特に重要であったのが塩でした。新潟湊に入った塩は、三条町まで信濃川舟運で遡上し、そこで小型船に積み替えられて、五十嵐川をさかのぼり、終点の舟着場として荒沢村の河岸が充てられ、ここにも荷物継立所が置かれました。荒沢村の船荷揚場には、約13坪の大きさの荷揚蔵のほか、問屋場と旅人の宿場を兼ねた建物が設置されました。

荒沢村と八十里越入口の吉ヶ平村の間は4里ほどあり、この間にも荷物継立所が必要であったので、早水村の枝村であった境村にも、10坪の荷揚蔵が設けられました。

そして、吉ヶ平村には、10坪の荷揚蔵と、馬20匹、馬屋17軒が設置され、荷物継立業務の体制が整えられました。

(次話に続く)



荷物継立所が置かれた木ノ根小屋付近

# 三条遺跡物語

第107話

生涯学習課 文化財係  
☎0256(46)5205

## 「八十里越を越えた先人たち②」～歴史の道 八十里越 その16～

天保の大改修が完了し牛馬の往来が可能となった翌年の天保15(1844)年に、会津側の叶津番所を通り八十里越を越えて越後へ来た馬の数などが書かれた「駒雑駄往来日記」(写真)があります。

これによると、5月25日から9月15日までの間で八十里越を越えた馬は289匹にもなり、6月18日には87匹もの馬が越えています。馬の産地は岩手や福島産が多いものの地元産もあったと思われます。

天保7(1836)年に、南山御蔵入領の名主12人が八十里越の改修を願い出た際に、「田島(福島県南会津町)の馬市に越後から多くの馬の仲買人であるばくろ馬喰が来て繁盛することに

なる」と改修の必要性を訴えた理由の一つとしていました。

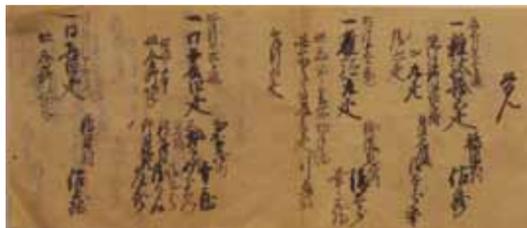
天保15年には、田島の馬市会所は4月と6月の2回、馬市を開催することとしました。6月に八十里越を越えた馬が多かったのは、馬市開催によるもので、八十里越の大改修は、大きな経済効果をもたらしました。(次話に続く)

通過月日	馬匹数
5月25日	15匹
6月11日	4
6月12日	9
6月13日	18
6月14日	80
6月16日	14
6月17日	1
6月18日	87
7月21日	2
7月25日	12
7月27日	5
7月28日	32
8月11日	8
8月15日	1
9月15日	1

(『八十里越—記録が語る歴史の道—』  
p126～131より作成)

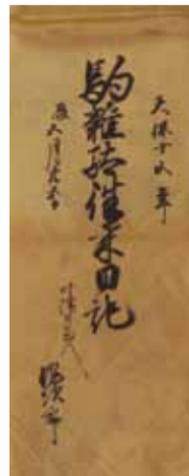
表 天保15年叶津番所を通り  
越後に来た馬匹数

(『只見町史』第1巻2004只見町)



駒雑駄往来日記 (右:表紙・左:部分)  
(所蔵 長谷部イネ氏)

叶津番所の日記の一つで、番所を通り八十里越で越後に向かった月日、馬の数、行き先、馬主、馬喰の名前が書かれています。駄馬は、留物であったので通行には手形が必要でしたが、「切手なし」や「切手不足」とあるものも見られます。



# 三条遺跡物語

第108話

生涯学習課 文化財係  
☎0256(46)5205

## 「八十里越を越えた先人たち⑩ ～歴史の道 八十里越 その17～」

江戸時代後期、庶民の間でも社寺参詣などの旅が盛んになりました。奥会津の人々も伊勢参りなどに出掛け、その旅日記が残されています。

その一つが、黒谷組石伏村（福島県只見町）目黒多平治が記した旅日記「伊勢道中記」（写真1）です。多平治は、只見、田子倉などの村々からの23人で、文久4（1864）年1月13日

に伊勢参りに出発し、下野街道を通り、まずは日光東照宮を参詣しました。その後、江戸へは寄らず、中山道に出て大井宿（岐阜県恵那市）まで進み、下街道を通り、参宮街道に入り南下し、2月12日に伊勢に到着しました。伊勢では、奥会津地方に檀家を持つ外宮所属の御師三日市太夫次郎家に宿泊し、外宮、内宮などを参詣し、無事にお伊勢参りを終えました。その後は、そのまま帰路にはつかず、奈良、高野山、大坂、四国の金比羅様、姫路、京などを廻って物見遊山の旅を楽しみました。3月20日に京を離れ、中山道を塩尻宿（長野県塩尻市）まで戻り、松本を抜けて善光寺（長野市）に参詣しました。3月30日には越後国に入り、北国街道を北上し、高田（上越市）、柏崎、寺泊を経て、弥彦に着き、

弥彦神社を参詣しました。その後4月5日に三条町に着き、旅籠「会津屋」で一晩を過ごしました（写真2）。翌6日には、遅場で一泊し、7日には最後の難所八十里越を「山越」して、奥会津に帰村しました。約80日間の長旅でした。（次話に続く）

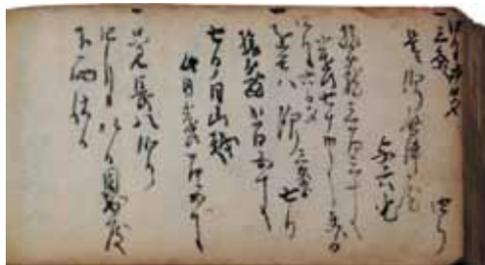


写真2 目黒宇太次家文書  
「伊勢道中記」（部分）  
（所蔵：只見町教育委員会）

4月5日に三条に着き、「会津屋」に宿泊したことから7日の「山越」までのことが書かれています。



写真1 目黒宇太次家文書  
「伊勢道中記」（表紙）  
（所蔵：只見町教育委員会）

# 三条遺跡物語

第109話

生涯学習課 文化財係  
☎0256(46)5205

## 「八十里越を越えた先人たち④ ~歴史の道 八十里越 その18~」

江戸時代終わり頃、嘉永元(1848)年から安政2(1855)年までに、越後側から八十里越を越えて叶津口留番所かのうづ くのどめぼんしよを通った女性のみ、人数、年齢、出立地、行き先を書き留めた「往来日記」(写真1)という古文書が残されています。

これに記録された女性は、8年間で353組、971人を数え、行き先は約7割が社寺参詣で、そのうち9割以上が日光参詣でした。中越地方から日光へ旅するには、八十里越がもっとも道程が短いことから、多くの参詣者が往来しました。

下田地区からは、中野原、森町、檜山、大浦、五百川、笹岡などから12組29人の女性が八十里越を越えて旅に出掛けています。年齢は7歳から65歳までで、1人(男性が一緒のことが多い)や2人連れ、4~6人などさまざまな人数の旅であったようです。

ここでも、行き先はほとんどが日光参詣(写真2)でした。また、柳津の円蔵寺(福島県柳津町)にある虚空蔵菩薩(写真3)に参詣するものもみられます。

この時代は「入鉄砲、出女」といわれるように、女性の旅には強い規制がありましたが、目的が社寺への参詣であれば許されたことが伺えます。(次話に続く)

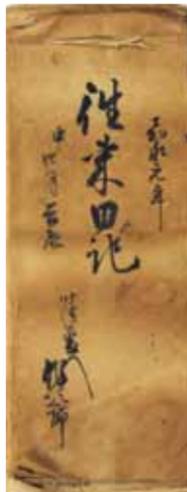


写真1  
福島県指定重要文化財  
長谷部大作家文書  
「往来日記」(表紙)  
(所蔵:長谷部イネ氏)



写真2  
「往来日記」(部分)

中野原村に住む7歳、8歳、15歳、16歳、20歳、40歳の女性6人と連れの男性2人が日光参詣のため、八十里越を越えて、嘉永元年5月4日に叶津口留番所を通ったときの記録

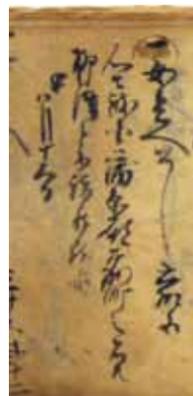


写真3  
「往来日記」(部分)

森町に住む65歳の女性が1人で柳津参詣のため、八十里越を越えて、嘉永元年8月13日に叶津口留番所を通ったときの記録

# 三条遺跡物語

第110話

生涯学習課 文化財係  
☎0256(46)5205

## 「八十里越を越えた先人たち③2 ～歴史の道 八十里越 その19～」

江戸時代末、慶応3(1867)年9月から積雪で通行できなくなるまでの約2か月間に、吉ヶ平から八十里越を越え叶津口留番所を通った男性の名前、年齢、職業、居住地、行先を書き留めた「往来入人改帳」(写真1)という古文書が残されています。

商人の往来が多いですが日光参詣や大工などの職人、百姓などが出稼ぎに行ったものもありました。蒲原郡の人が多く、合計291人も通行しました。

下田地区では、棚鱗村、荒沢村、牛野尾村などから22人、三条地区では、三条町、一ノ木戸村、大崎村などから25人、栄地区では、大面村、戸口村などから7人、合計54人が八十里越を越えました。ここでも約半数が商人で、天保の大改修後、人と物の往来が盛んになったことを物語っています。

男性のみを対象にしたこの入人改めの詳細な目的は不明ですが、戊辰戦争の前年にあたることから、会津藩の指示による密偵の取締りが目的だったのではないかともいわれています。

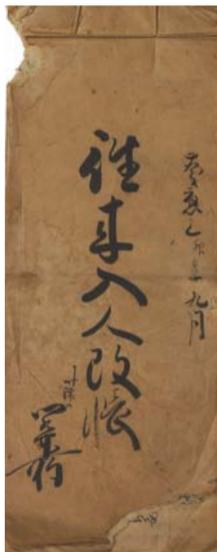
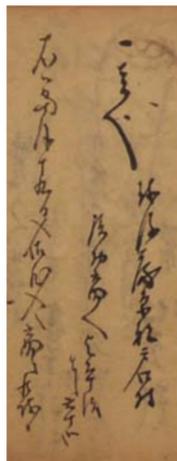
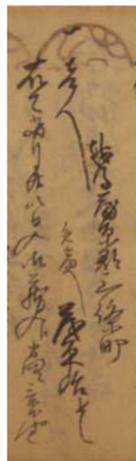


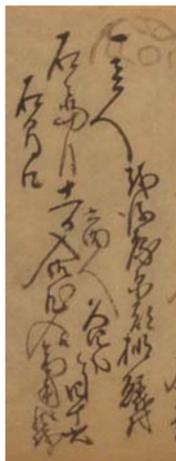
写真1  
福島県指定重要文化財  
長谷部大作家文書  
「往来入人改帳」(表紙)  
(所蔵:長谷部イネ氏)



戸口村に住む鉄物商人  
与平治62歳が、南山御  
蔵入領での商売のため  
八十里越を越え、叶津  
口留番所を通った時の  
記録



三条町に住む魚商  
人茂平治が、南山御  
蔵入領での商売のため  
八十里越を越え、叶津  
口留番所を通った時の  
記録



棚鱗村に住む商人久  
四郎46歳が、南山御  
蔵入領での商売のため  
八十里越を越え、叶  
津口留番所を通った  
時の記録

写真2 「往来入人改帳」(部分)